◆特　集◆

人間文化研究所と大学・地域をつなぐ試み

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　阪井　芳貴

名古屋市立大学人間文化研究所は、学部付置機関として二〇〇四年に発足しました。これは、学部・研究科所属の教員にとって念願の機関でありました。研究所と名の付くものを持っていることが、一人前の学部としての評価を得るための必須条件のように考えられてきたからです。

当初は、村井忠政初代研究所長のもと、学内の研究体制の確立、すなわち個々の教員の研究のサポートならびに教員同士の研究上の連携などの手助けをすることに力を入れていたと思います。この建物の一階、いまは国際センターの部屋として使われている部屋を研究所オフィスとしていましたが、壁一面に外部資金獲得状況を張り出してあったことを鮮明に覚えています。正直に申せば、私はああいうのはあまり好きではありませんでした・・・。競争をあおるような気がしたから、というのが理由です。

それはさておき、その後徐々に学内外に発信していく活動がスタート、充実をめざしました。具体的な活動としては、共同研究プロジェクトの募集と運営、これは今日の各パネリストのご報告の柱となっている事業です。そして、年一回開かれる最も大きなイベントである講演会・シンポジウムの開催、これは今日が第十回目となります。またほぼ毎月開かれてきた「マンデーサロン」「サイエンスカフェ」の企画・運営、さらに「年報」の編集発行、また「ニューズレター」の発行がありました。「年報」は、共同研究プロジェクトとも密接にリンクし、いまも研究所からの発信ツールとして重要な位置づけがされています。が、「ニューズレター」は私が所員として研究所の運営に携わるようになって、しばらくして止めました。定期的にレターを編集・発行することは大変大きな負担を伴っていたからです。その代わり、これも研究所発足とともに立ち上げたホームページを充実させることにいたしました。その判断には先見の明があったと思っています。

これらの活動は、研究所の設立理念である「人間・地域・共生」を具体化するべく企画・運営されてきました。そして、継続してゆくための工夫と努力が積み重ねられてきたと思っています。そこには、村井所長が「年報」創刊号の巻頭言で述べておられる「人文社会学部・人間文化研究科の研究活動を、アカデミズムの世界に限定せず、広く社会に向けて情報発信する場に」という姿勢を受け継ぐ意志が強く働いていたと言えるでしょう。

一方で、これらの活動の運営、そして継続には、とくに所員たちにより多大の努力が払われてきたのも事実です。私は、所員・所長を七年間務めました。その間、休むことなく上記イベントの企画と運営、集客、外部施設との交渉、広報活動をおこなっていましたし、そのほかにも大学本部への報告、予算管理という重要な仕事、さらに年度末近くには「年報」の企画・編集作業がありました。とりわけ腐心したのは「サイエンスカフェ」の運営でした。現在は、川澄キャンパスにある「サクラサイドテラス」を会場とすることで安定した開催ができていますが、この形に至るまでには、かなり苦労しました。

詳細はあえて申しませんが、研究所の、ひいては人文社会学部・人間文化研究科の知名度をあげるには立地条件的には文句なしのかつての会場が、収益の不安定さを理由に会場提供を断ってきたときには、まさに持続可能性の困難さを痛感いたしました。ただ、災い転じて福と申しますか、「サクラサイドテラス」を会場とするようになり、今日のテーマのひとつである地域との連携が形をなすようになり、結果的によかったのではないかと感じています。

また、このサイエンスカフェやマンデーサロンの広報活動においても、徐々に地域密着型にシフトしていきました。「広報なごや」を活用した情報発信、地域住民に無料配付される情報紙への情報掲載や学区単位の組織への広報依頼を積極的におこない、一定の効果が得られるようになりました。これらは、まさに大学・研究所と地域の人々との信頼とネットワークによってなりたっていると思います。あらためて、大学入試広報課をはじめ関係者のかたがたにお礼申し上げたいと思います。

ただ、マスコミへの露出度という点では、まだまだだなぁという気もいたします。これは今後の課題のひとつだと思っています。

さて、地道かつ着実に活動を継続・発展させてきた本研究所ですが、その活動内容を直接学内外に発信する役割を負ってきたのが「年報」であります。レジュメに挙げましたように、毎号特集を組んで編集をおこなってきました。この特集は、おもに、共同研究プロジェクトのテーマ、ならびにその年度に開かれた講演会・シンポジウムの内容を受けた形で組んできました。

創刊号　共生
第2号　越境する文学
第3号　福祉
第4号　名古屋の観光
第5号　「持続可能な社会」とＥＳＤ
第6号　博物館と大学
第7号　博物館と大学Ⅱ
第8号　「近代」の文化財
　　―〈産業遺産〉の保存と継承―
第9号　「現代社会における文化財保護の新しいあり方
　　―「パブリック・アーケオロジー」の視座から―」
第10号　ＥＳＤと中部の「里山資本主義」

ごらんのように、本日のこの会の趣旨のひとつが「回顧」でありますから、パネリストの方々の報告テーマと重なるものばかりであるのは当然でありますが、いずれも現在進行形のテーマであることもまた事実で、本日のもうひとつの趣旨である「展望」に際しても、これら「年報」を折に触れ再読することは大切なことなのではないかと思ったりしております。

私は、このうち、第3号から第9号までの編集に携わりましたが、とりわけ、第6号から第9号にかけては、所長として関わりました。それは大学と博物館との連携ならびに日本の文化財をいかに保存継承していくのかという、いわば私の個人的な関心からそれを研究所および学部研究科の取り組むべきテーマに昇華させ、しかも四年間も一貫して継続させるということをお許しいただいたということにほかなりません。思い返せば、なんと勝手な、また贅沢なことを受け容れていただいたのかと汗顔の至りですが、しかしこれが研究という世界にとどまらず、学部学生の活動として形を変え継続・定着してきたことは、自慢しても良いのではないかとも思っています。

では、この博物館との連携について、少し詳しくご紹介しておこうと思います。

名古屋市博物館との連携について検討が始まったのは二〇〇八年度の

末頃でした。二〇〇九年度から私も担当者のひとりであった現代社会学科の専門科目「社会調査実習」の調査対象として名古屋市博物館を設定することで、学生の勉強、活動として博物館との連携を具体化していくことをねらい、まさにそれがとても良い方向に動き出しました。二〇〇九年度と二〇一〇年度の「はくぶつかんなつまつり」における「ナイトミュージアム」およびワークショップは、実は、人間文化研究所後援という形での開催でもありました。これは、もちろん私が画策したことですが、狙いはふたつありました。ひとつは学生たちの活動を大学が支援しているということを内外に示すこと、もちろん学生たちに安心感をもたらすことにもなります。もうひとつは、研究所の存在を博物館来館者にPRすること、です。それがどれだけ奏功したかは定かではありませんが、これもひとつの発信の仕方ではないかと思っています。こうして始まった学生による連携事業はその後、博物館サポーターMAROへ引き継がれ今日に至っており、一定の評価をいただいております。これらの原点となったのが、二〇一〇年の研究所主催講演会・シンポジウムでした。当時の九州国立博物館館長三輪嘉六氏をお招きして

基調講演「市民共生の博物館を目指して―九州国立博物館―」をお願いし、さらに三輪氏に加え、水谷栄太郎氏（名古屋市博物館副館長）、坂本喜樹氏（瑞穂通商店街青年部役員）、山田明（人間文化研究科教授）をパネリスト、司会阪井による「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」と題するシンポジウムをひらきました。以下に、この講演会・シンポジウムを「社会調査実習」阪井班の学生がまとめた報告書の一部を「二〇一〇年度社会調査実習阪井班報告書」より掲出しておきます。

…………………………………

第2節　九州国立博物館の取り組み・講演会・シンポジウム
～九州国立博物館ボランティアとの意見交換会を交えて～

1．九州国立博物館の取り組み
（省略）

2．人間文化研究所開設6周年記念講演会・シンポジウム

名古屋市立大学人間文化研究所開設六周年を記念して二〇一〇年一一月二七日（土）に滝子（山の畑）キャンパス1号館で開催された講演会とシンポジウムである。

（1）記念講演会

講師に九州国立博物館館長の三輪嘉六氏を迎え、「市民共生の博物館を目指して―九州国立博物館―」を基調講演とする講演会が開催された。以降はスライドを用いた説明の中から一部を抜粋して掲載してある。

①九州国立博物館とは

九州国立博物館は二〇一〇年一〇月一六日（土）で開館五周年を迎える、日本で四番目の文化財の保存・活用を中心とした国立博物館であり、年間平均入場者数は百六十万人にものぼる。「市民とともにある」というあり方を一つの大きな目標としており、「学校より面白く、教科書よりわかりやすい」、「文化は西から、九州から」、「日本文化の形成はアジアの視点から見る」という三つのコ

ンセプトを掲げている。また、ここ数年のアジアからの観光客の増加に伴い、町の人々も博物館の場所を相手国の言語で説明できるほどである。

②最初からみんなが作った博物館

もともと九州の人には九州に国立博物館を作りたいとの強い思いがあった。そのため、資金面では市民が一〇％を寄付するなど、既に市民参加が見られた。また、博物館では、ガラス張りの外観、博物館科学の設置、教育学習向けの場を作るなど様々な工夫が見られる。その際、ボランティアの存在が大きな役割を果

たした。博物館ができてからも、市民に大きな収蔵庫や修理の様子を見てもらうバックヤードツアーの実施を行っている。

③ボランティアの役割

地元の音楽専攻の学生による定期演奏会の開催、「てくてくぶらり旅」として市民ボランティアが博物館を一つの拠点として歩く会を開催するなど、多様な取り組みがなされており、現在約三五〇名のボランティアが活躍している。また、「阿修羅展」では七四万人という多くの人が訪れた。そのためボランティアの人たちの提案により、障がい者にとってゆっくり見てもらう日を一日設け、大変喜ばれた。

④すべての人に楽しんでもらえる博物館を

九州国立博物館では、展示品である土器の台をわざと斜めにカットすることで、車いすの人が座ったままでも見やすいように配慮している。また、博物館という物を見る場所であるにもかかわらず、白い杖をついた目の不自由な入場者が多く、盲導犬を連れた人が訪れたこともあった。その際、三輪館長が失礼を承知で「なぜお見えになったのですか」と尋ねると、「健常者と同じ空気に当たりたい」との答えが返ってきた。そういった経験から、すべての人に五感で楽しんでもらうためには何をするべきか、市民とどう博物館を作っていくのかを常に模索している。また、博物館には「定礎」と書かれた石碑があり、その二文字には、いつまでも子供たちのために、市民とともにある博物館を作っていくという願いが込められている。

（2）シンポジウム

パネリストに、三輪嘉六氏、水谷栄太郎氏（名古屋市博物館副館長）、坂本喜樹氏（瑞穂通商店街青年部役員）、山田明氏（名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授）を、司会に阪井芳貴教授（人間文化研究所長）を迎え、「市博物館と市立大学と地域連携で魅力あるまちづくりをめざして」をテーマに行われた。

以下、各パネリストの意見を簡潔にまとめた。

＜水谷副館長＞

・三輪先生のお話から目標とコンセプトを明確にし、常に標榜していくということを忘れがちであったため、見習うべきだと感じた。

・いろんな立場の人の意見を取り入れることでいろんな可能性が見えてくるのでは。また、大学・商店街・近隣住民との関わりを持つことがこれからもっと重要になってくる。

＜坂本青年部長＞

・桜山周辺に住んでいる人々にとっては市大病院や博物館がランドマークとなっていて、名古屋市博物館は地域のシンボルとして自慢していい施設だと思っている。

・商店街を門前町的な感覚で、博物館を観光施設として捉えていくのも大事ではないか。

＜山田教授＞

・博物館を集客施設として、観光資源としてまちづくりと関連付けな

がら展開できたら良い。

・大学の授業で取り上げて、自分たちが歩いてアンケートや聞き取りを行うなど、きっかけ作りが大事ではないか。

<三輪館長>

・広く開かれた場所として、展示室でのパーティなどがあってもいいのではないか。

・大学生を博物館に足を運ばせるために、まずは学校の先生がどれくらい博物館に関心を持っているか、先生を教育することが大事である。

・学生の目線には博物館側が気付かない目線もたくさんあるので、博物館や商店街がそれをどう大事にするか、学生のリサーチをどこまで信じて生かしていくかが大切である。

・学生ならではの知的なものがほしい。例えば名古屋市博物館のなつまつりで行われる天の川に大化の改新の時の天の川や鎌倉幕府を開いたときの天の川を調べて再現するなど。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

さらに、この報告書に挿入されたコラム「博物館の存在意義とは」には、以下のような見解が示されています。

では歴史や文化を伝える以外に博物館の新たな役割はどこにあるのだろうか。ヒントは九州国立博物館館長三輪嘉六氏の博物館を地域の文化的景観にしていくという発想にあるのではないか。

博物館を地域の文化的景観にしていくということはどういうことなのか。具体的には博物館を観光の中心地に据え、博物館、地元商店街、大学の三者が連携することである。では博物館が観光の中心になるにはどうしたらよいのか。これに関連して三輪氏は、例えば駐車場の整備などインフラを整えることで観光客を呼び込むという提案をしている。博物館が観光の中心地になれば必然的に多くの人に開かれた施設へと博物館は生まれ変わる。また地元商店街や大学と連帯をしていくことで博物館を地元から愛される施設にしていくことも必要だ。つまり地元の中心に博物館を据えることで、博物館そのものが地元にとって絶対になくてはならない文化的施設になるということだ。

この発想に博物館の新たな役割、活路を見いだすことができるのではないか。博物館を取り巻く環境が悪化する中で博物館が生き残る道はまさにこの発想にあるといっても過言ではないだろう。

以上のような学生の学びを、学部全体で共有し、さらに名古屋市立大学全学で名古屋市博物館と連携できるようなシステムを構築したいという考えから、前述したように、この数年間活動を続けてきたわけです。徐々に成果を挙げつつあるとはいえ、学部学生のサークルとしての活動にはそれなりの限度もあり、やはり教職員も巻き込んだ形を今後さらに追究してゆかねばと考えます。その中心の役割となるべき機関のひとつとして、人間文化研究所には大いに期待したいと思っています。

研究所は、もちろん教員の研究を促進するための施設・組織であり、また内外の大学や研究機関との関わりを持つことにより教員にさまざまな情報を提供したり、こちらから発信したりする重要な役割を持っています。が、それにとどまらず、大学が立地する地域とのつながり、ならびに名古屋市の種々の機関とのつながりにも留意し、大学が有する知的財産をそれらに還元するための窓口、外からの働きかけの受け皿としての役割も重視してゆくことが今後ますます大切だと考えます